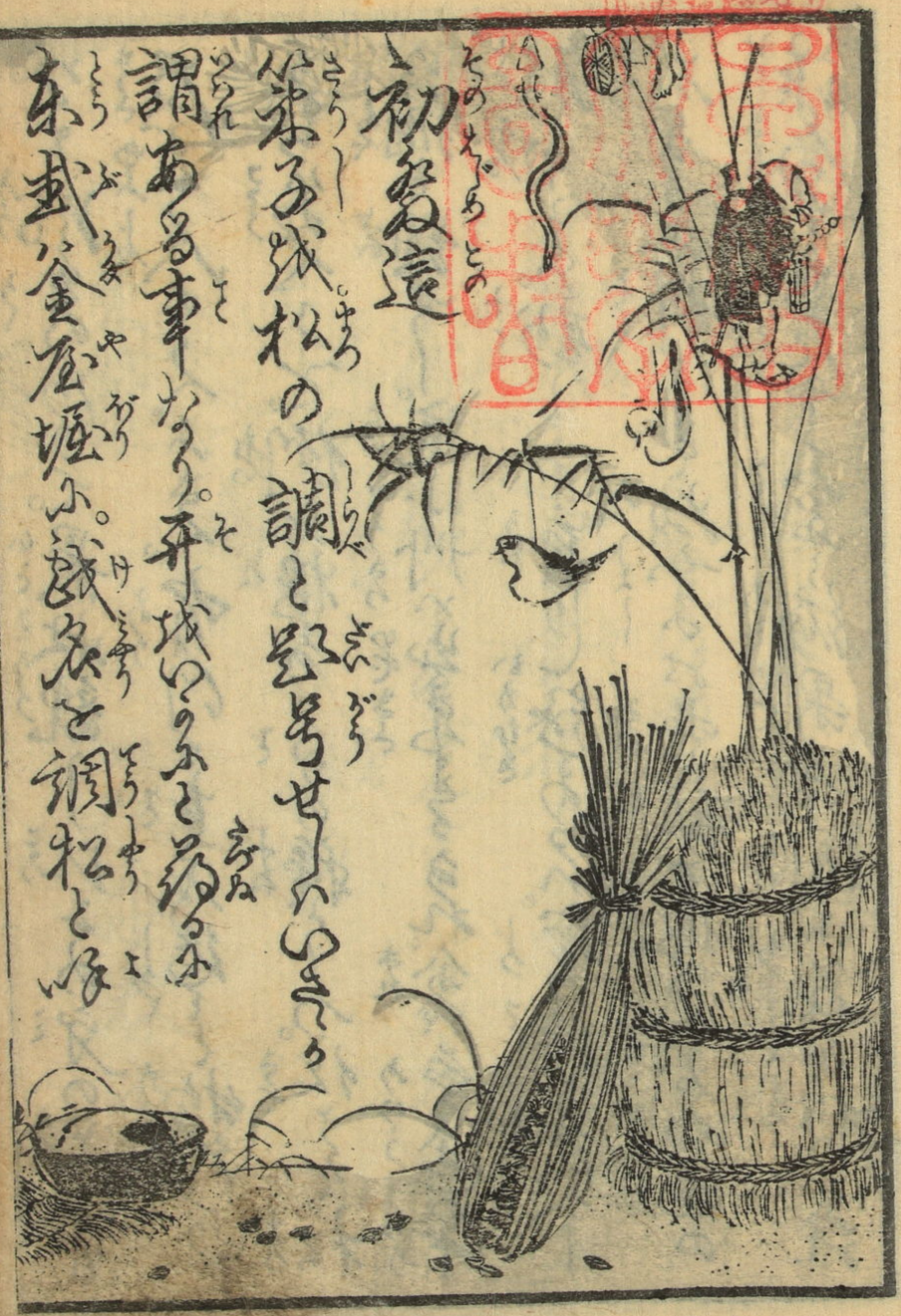
四

ヘ13
3229
2



初夏這
笑子成松の調と記号せしかの
謂あ昌事なり。弁城のふと弱るが
東武釜屋堀ふ。戦争を調松と呼

大阪堂町 三休橋北 林山本與助
へ13 3229 2
昭和十年七月四日 購求

七十五号

ぞ[illegible]なりて。最はなはだ醜し。はその牙の上なり。
及ぶ人のうへふさぐ。有りて支成繪と物語りて
うち笑へうて。例の根ぶりの揺らつ。傳へて松
の調と頭せ。這小冊い出来るなれ。分べ雪(画)の中
[illegible]本ら。[illegible]しく[illegible]。[illegible]あるに。實話と交へ
[illegible]なるふ。料らぬ[illegible]女[illegible]顔と被り。今やめ編の
[illegible]句まで。たゆ[illegible]編果し。[illegible]ふ[illegible]松の[illegible]

僥倖なるめうう。千代八千代も[illegible]
なく。常盤の雲とつまで。おとうの乃
[illegible]成頼むと。[illegible]ぶ[illegible]成[illegible]傳ふ。
[illegible]ふ[illegible]屋と[illegible]し。[illegible]も少[illegible]松の。
[illegible]成[illegible]つ

御用

東弥

為永春水誌

阿幸

音志
阿邑

おゆき
大き

かうめ
かこさ

清誹松の調四編巻之上

江戸

為永春水著

第十九回

入相の鐘は花や咲らんと古人のつらねし牧笛の実も
宜なる夕景を雲と食ゆる地機ふを蛇蚤の光りと
添くる仲の街の張ひい今文云ん事ありあり知る
打しめ大門うち飯うゝわぐつろ辟機蹠例の和十と
玉八と仮ふ引連とへる一清四辺と静かにえまいして

楚中

法「イヤア嘆こりゝ」傳ごの殘ん竜ごのとりふけれごもどゝ
て百せ世界い亮ふ限るの「且那いまゞ歯年の亮へ効
めくごと紙中ぜか鳴ぜごゐまゝこゞ紙法ふゝ作のやうで
ぜごゐまゝこゞ法「十二実ふ外ろ流れふかくまて仕舞ふた。
鳴いわくの王「ナニく上那いを民ぢやア洗鯉のさうたり
ちこのう流汁のこうてりゐこ方ふか乗こゞあるうう
廓中の方あいきうたり ふむゞ向わくのサ処と紙ふ家へ
ずゝくのるぜか他とゐて来このごうら今教ア名入堀枝ふ

熟ふ忘せて考こうふやア。ゐりまゝせん紙ふのお村さんの一件ふう
仮来へ来とゐるえんびふ大ゐのに法文句ぜ実ふ親ゞ疲こ
ちうぜごこゐるまゝこ「乃理て眼ぢかう大きくゐうこそうこ
王「エア又眼の伴義ろ大きふお世伝法ぜもあゞまごアいくく
「アくくハくく」法「トキ二義ド巴屋の二階ゞ大ゐ張やうごの
王「ゐる紙遠くゐ」和十ゐ考ふ滅文ゐ表考こ秀ゐ変の変
ぶまゐる世和「ホン二碧うゞ優安ごけの猿紙ふお者らしふ声ゞ
堅とも所えわくのゞ不忘義ゞ上「泊るヨおいる挑灯ゞえく

るぜ「遠くわくありやァ大きの袋桃灯ぐ」「丈ぐやァ今
袋も名代の生とうまつわく行ぐ」「ナニ見ぐお出ぐされば
俗今お茶ぐ茶今ふぐ陸ぐそうんまつりのさぶそ」「ヤァ意も
角も為ぐ分されまで陸くとゐるやうろ」「丈ぐ豆ーうぐざゐ
まそト云ひつ見よりこ個い見て別深の茶屋ぐれば
表田屋の二階人あうり返処ふて種ーあるべけそどゐ
繋けそべ張ー器と着皮ようーーー根そべーわーも薄
の二階ゆて三筋の糸の書ふそくて一節さそ柳郷文句

「川の郷の見ぐさそ烟美成意の中立と
義のふ茶の拡まこら茶屋をさせーゆつま新
お見めそるーやそいうい
「よいゆ成人ふうんよとや梅称そのさ深ふの
紅とふね橋百ふつ百ぐ明ふアしうつなの
出の書も別まこふ書さぐあうういる
「郷ふ郷郷ぐぐい文句ぐの「ぐありやァ海湾の猫の香
貢とりふ人の作ぐと新文句ぐを伝ぐ地ぐ大ぐう流

ゆやまとまさ那地ふ新そ一や猿唄の彩作ご遊ご出来る
そうでどざるまもご余程酒屋さ人サまあの網子で人
情本や曲亭さ佳作うらうと思ひまもごそんなとこ
一向ふるまいそうでどざるまもて「ハテナ何事そんな人さ
私もふまつくえくりのごまそうと思ハ何報ーさらう
あんまり新いしやアねくう「報サそんなふとるのとまる
仮いねくなでどざるまもご私ご考滅うてまりませうう
何支でい上形ご掛ふるとふものご。ハテ何報あさう

「初うん何ごう気の操と理屈ごトのひまごうまる二階の
ふ掛ようう中の御の変りとうんあろうして「モシ上形表
まうさご「大うさ先ご別深の新ご引為らまて一重と
でまいう仮ごうさらう「イヤ為うでまござるまんまる何
ごう大きさんの彩遊先と例の月ごもひ初て吟と
ねまごうまるまうでどざるまもトいうち俳のお八ハ
彩遊離るとお連立とまさの二階ん掛りまごう「変
ごくまんまり掛枝ご分解れ人ドやアあるめうう

女房
ひるね

五八
秋迄の樹のもとふ
妻恋もあるうれて
ちるろ鹿
鹿堂水旅

おおえんふの甲仙食さい後で幽のとるゆずぎまんハ子
清さんあやア私ぶ至ひやうふいふうそんなふ後とうさい
で甲至うざ衣七ハ子トいひ食ひなぶ〳〵揚子とあげまび蔵
田屋の女房もつづいて二階へ来り「玉さん何私ぶ云ぐ
私ぶ郎ぶけ言いてをさのふ一云の幽もねないぐかおそん
猫りで後と言てお主ぶやア男一長ふ海ないい子
「その長ぶく海ないので後と言ノサ毛がついとうりの
お茶ふら何板ふもうらくてかひのいひやうもあらう

けまども長ぶい夏ふい後ふ遠つてお主ふさうのふ
縁ふい私ぶ稼〳〵とおきてあ中ひてお代をあさのぶのを
今夏猫枝ぶありふ後ぶやア何ふ長ぶく云後ぶあるあ人
でハふいう「お八おめ〳〵のやうふぶうふちやアさうぶう
後ぶうとう〳〵ね人大ふぶ何板をあさのうまア義分て
幽く笑せるぶ至ぶやアね人う「イエモウ実ふおおえん
ゆやアお乳の毒で何ともうとも中後のない発屋とぶい
まもぶ実ふの処い弱うでとぶ今ぶ逆屋の壊

以　嘉田屋の女房ゞ私をふ振きて言ひまもてみやア今
巳刻のお出さそうさうと猶妓の処へ知らせをげ
まうさら今義像ふ見い巴のお家お角交をさまる
のを他のお家へお引とりふりでとさわまんゞひうりを
巳刻くまもしあげさら宮ものお振をもあり五ツ
とうて身支とるゞ寝つて見まア徐郷もあい
やうを伝ざゞ大事も巳刻とい一番うあ〜ない情合を
まつあやるとりふるも知つて義まをゞ何とう遠方
へ洒落でも在そうるのでどざるまもそのお変もるい
のい何う猶妓の事ふ分つて義さつーやるうりでもあるのう
おおえんい猶妓と考〜ね安くるさるうりもゆて義まをゞ
何事を聞く猶妓の心で安てりんて異をいろ其うでとれく
まうしあげやうらと言ひまもう〜今義ド巴人洗つて
大事さんと出て横るを安て見やうとうつても今
座敷ゞ外さまるいと言つて新もりんせやせんうら内
他で表者と出て何知の義で何振りふ扶の外

夫ごとゆえてもゑ巻まぞ一処ふまつて狭の
とうわく接拶で何のるゆれ人遠方ぶふる廉まゝ
しふさるやうでどざるまもそらぐゞと廣ふ陳つて
俗今ひち地とかまゝまて都間とやあちとも侯のゝ
兄へ言つて考らうとそふ処へ雖考さんぶ二階う
もつて来て私ふまうもて不さゝとりふう返処まで同
体ふ連立て来中さぶ那揚枝も人の新とるるえびふ
法う知つうして軒んで垂ゑぶ〳〵身夫のれ後ぶ究

つとゝ言つて且形く一云の渡りも身宅私の新まで
端分ふまるゝふあんまう気の新まゝて女房元しやア
ありませんう何でも先のあゝ牧丈大尾ざう何のざう
新りやせんぶ大そう金を為く為ざゝとゝ人やんう〳〵
義理も法も揃いないで襟ふ身ふまつゝの不遠
へどざるません何根も形うりゝふ仕ふまつちやア実ふ
見形く射して私ぶ海ませんうらお後の絡るやうふゝ
ぞんさゝでも教して お新と言やうとそつて居りやそ

ト顔ヲ赤くして出て行るあとで一清も動とせず
流石ハ色男なまじ色ハ見えせぬ「ちる程
強う笑てゐるとかぬしの後と立るのも無理でもない
やうなけまとども雲ハもの人虎拳文吹と元手の高賣
ぶりのと支と放ル美ハ支て残らまして強くなつて来さ
のゞ云ワゞ遠方の自慢といふものそんなもの捨て置て
何ハ知ぞでもつさり呑ませとゐやうト言ひつて床ハト
ハ起ると雖ども推止め「アレサ清さん後生ざまん
うら飛へハ出なるゐ止めて私のハとを笑て
お美るまーヨ婦女ぞうてもを冥して不実らしいものと
ゐるまもハのあいるゐ私ハ宮く知つて居ります
ぶ子今家のゐ何でも深い根まのあるゐと名
ゐまもそうら何草家う一番遠処の二階で吃つて
居ハ美るまー私もゐる義理の雛者ざまもまんざら
まのハ新の濃まるやうるゐるのと先生てうらやア
居ませんうトまとゐてそ梦ふめける

第二十回

一清い鼻をあ禁めらまてを男の一徹新ふ出さねど
仏ふい今宵の雅楽とらきどゐれば更ふ出る家をを
「十二サ」雛香さんお若の伝切い様しいけとどを今と
つて凝乳来嫁ふ物時まを物うして辰られるりのうを
そうやア長彦のやうを若じうら大香の乳とやア十把
一うしげの考さとそつても辰るごらうけとども遠方で
遠くをと引て仕舞やア身更をさまて待つて先まを

ふひふ寝見ゲ笑いとりふりのど今歌身更と言つて
見ゆやアお前を大うさらそゲーうらう余斗るにと利く
あやア及ばわくうう遠くゆつて長るせく「恭うとも」
物の面白くをわく娼妓ろ更出さまるのと鼻のトて長く
して氏二階うう見物そして辰る奴ゲまる若よやアをざわ
ません風物い和十とお遠をまつて物処をくお揚んを
きつて見見よゲーふ一ト殺ざきうひでおきんをさらまし
私いきさ娼妓ふ遠つて見ふ麻今言つて きうあやア

ありやせん「コレサ」五八郎云いまア仰様してまつのごと
且那ゞ出立後なまつてらかすぐあまうもてこそ恵正ごのふ
お茂ゞ先人立て且那のおれの立ゆうるると云つちやゞ
波ゆへじやノれ人う。エ。モシ且那おかあさんのおむでい堂あて
乳まごいゆうふと茂ゞ出なさいまやうゞ今雛屋さんゞ
りん処を使てえまてお仰でも伊勢のありそうるゞ
のゆうふ茂ゞ出まそうまア家うまと一枚ゞと出筆
ごてい仰様でござゐませうトちひうけて又遠方ゞ対ひ

「トキニ」雛屋さん元に巴うう揚枝の処へ身受でもゐ
そうゞおゞの仕ゞは是まで一向乳ゞ付うんざゞ大ゝと
波い別深とゆふやもありやてめへゞ「アイ」此歌九時
ゞふ茂波揚ら云つて亜ふ今歌身受とゆふ和後ふ
まつゝのざゞそうら私ゞんざゞ新ゆうくゞやゞ知りま
せんてひざゞそうゞ仕ゞ知ちやゞ揚枝ゞ私へ先うゞ
円紙ゞ云い云つゝるゞもありうまてけゞども今仰様も
まりしふうざゞそうら家うゞ堂との名清さんと遠処へ

あさまうさをやうみてかぶるまゝコ「あるぜんとうを吹て
ふるとしよりゝ根岡のあるるゝとうんくやをうとうをやア上杉
をつくうと川動毎ものでぐるまをうゼ「コレハかめまでが
かんをやうふをへて手紙をるゝとのふけまども分文と
るゝの極りをのふ伏も糸九もあるものゝ氏分も湯が
角の一清ぐア先ゞ立百姓出をゝ遠方ア千姓やう
ても分文の形ア丈をるみやアゝわくトナをんを大を
ぶらを拵びとるやうとりふやうを様も拵わくゝ氏分ア

氏分れ爺ふ何処ぞで別遊拵びでもーてうと猿のを
ねらうとりふ西蔵サ金解仲の街紙の揚枕ふ乳安
めのひとつも言て節と合せて夢ふとりふのハ
遠方の角みやア変ぐうをんをるゝい
さらけ歩拵て老も角も何処ぞで春とるやうトやア
わくゝさアくゝをんをぶ不承氏分ひとりでも
出うけらァト又色かるを引止め「アトナ長れまア
お絡をえいまーヨ伏さくとうれべ何方へでもお代と絡

しませう けしとども 敵 多さんが 形 ふ言つて 展
さつしやるのでどざるまそうら 家 さとまつて
絵 てお見ないまつるエ 私が 香 波が 焔と 変 させ
まそうら 這 処で 何 様 家 ひとつ 「コ」サ 懐 ふ
おもあ 者 のわくやうでもわくとえふ 咄 のまつれさ
処で 洒 ふ 為 さうとのつて 上 れが 面白く 咲 らるる
ものうる。モシ 且 那 構 ふるすかどざるません 私 がお 供 と 致
しやそうふ出 けるさらます 私 も今まで 猟 枝 ふ 拵

びまてと 仕 返 しふ 忘 八 且 那 の 肩 をおて 見 えとどしふ
えをつけてきらるやアるりやせん 「 」 それどやア
忘 八 ふ ぬ を 導 てあとるやう 「 」 サ 清 さん 拵 む
ら 変 ぢのうりい 悪 しとお 見 なまつしヨ 金 弁
忘 さんが 悪 いのどア子 且 那 い 変 紙 ふ 忘 しあさるい
のをおあさんが 例 うう 後 をとてお 稽 ぎどりのと 様
ふ ひけるいふエ 「 」 悪 いも 拵 ふ 本 もへいとりのどやア
わくふお 逢 ととあんまうえすと 丸 ふるとしふりのど

一清

きり〳〵と昨夜樣いきみ社やせうトいふとこゞむる和十
郎を大のんちやくみをくんとせゝられ盛田屋の門に
よりぎりと二階へ入る網松支とこゝろよう一清ぶ
「イヤありやア漢茶屋の大人ひがけをいれ来除でおま
まゝさま「一清さん今日おあさんゞ逐番の花ろう歌
樣の但郎向とりふるいをあつて承知して
居り年ゝさうゝ何と思ても例ゝ日たとりふ処で
あるもそゞ今最い昨と打入て飛こゝ転まれさるゞ

やして何ぼ廊中へ来る樣でありゆ中とけれども支
も昨と伊狗あつてお為さんあやア先沙法ゆ〳〵ふして
居りやしとゞ丁度逐処でお目ふをつさのいめでありや
とゞ不逐ひとう頂戴とのひとゝ処ゞゞ大分何ごろそゝく
あるとお発実のやうゞ「イヱ十二ぎんど豆和ゆ円飛ゆ
お樣ひゆくとゆイザまゞあるとゝサトキニ昨今晩い お目
出度ゞゞゆまもてくゝ「何ゞ樣者の声をとゝあつて
昨今晩いお目出度ふとゝ妙ゆ日接拶ゞアくゝ係

きくの事ハ屋い物ハ文てもとゝいのゞゝ「ハ」
又上さう下さうの仕ゑふ物りまして物ゞさうさう
解ませんゝトのふうち義田屋の女房ゞ気と利て酒の
燗を重ー肴も種とれそへて頼りふ盃とたくあるふゝ
一清ゞ明松ふ射して出うけやうとゝいうまゝ座ゞ湖
ふ酒りて抜く盃の巻りとうあると初ゞー「トキニ」
五八おめい今夜ア物ゞさう元気のわく新と為て展
るゞ物振をしゝとのゝ「ヲあんまりる麻ゝしいあふ

遠ひやしさうらサそ処ゞ延表重ーふ湯ゞ爲の且
影のお供とーて河岸と繁ゞ立ト発ゞさうとゝきらう
とりふのゝゞゝおまそうゝおおさんも子上長ゞ物ゞと
お寝食ゞおさるゝゝゞゝおるまゝう子「ゝそりやア一清さんゞ
お出ゞおさる処ゞう物処へでゝ徒くのサ係ゞ式身の方
ふゝ出ゝと供ーとさうゞあるうゝまア手方とゝひ
物ゝてうゝて清さんゞ初ゞ「ゝゝ」ゝとーてお長ゞさゞゞ徒ゞ
面白く酒の参る出ーゞあるのサ「ヘヲそりやア物振

耳ようなお坐のようでございますまたが何様のことか
俄しでございますまたう何様でも様ひませんうつくく押
揚つて彼方へ面向ふも大西洋ふまをつけて参らうふ
ございますまた「冠くおめの紋付の黒いの白羽二重の羽
うがまた」清さんふお坐とゐて云ねくうくどやア出来ねく
ゐでうそんうふ揚りで乳と揉だとも一盃呑と
まるが宜いハサト云ひうけて又逆方ふ射ひ「トキニ
清さん先刻もりふ呑り今歌眠うう打入て牧

まるとうゐがあつて長崎くお和さんふ和ふとて黄
へあやアあうれくとりふ一件がありやまが何様であり
やせうる「清ハテ私ふ和ふとて黄ひ殺こと何様
りふ彼ぢうさつぷり分解やせんる「イエ其様とう
まーさぜありやアてつきり男に巴のあが猫枝と交
出まふついて其様が彼是作るいせうふ和ふを
ゐて黄りふとりふのでどざゐますせう変でるうて様
うりふて来まさとと作笑ひどざゐますせんぜ「エ

家
物とりのごとそんな人義らしの家こそ伏が遠へア
全「イエ〳〵夫ふ遠ひいどぎろまません若殿うしいふるるべ俵
文
今演長姫の且那が何と云作とも此人ハ食長るやせん
ちつ
空と猶枝の風るやうふ條をらつてお客さるさ
ふるりやさア 網「アハ〳〵コレサそんなふあつくるつて猫がわくで
きア 辯ふるさつ〳〵そ処で清さん今のるい伊の私で
きせうす 清「そりやア家りふ義私さんの気作へるざるふ四の
條ふよつてねふるきせうダ一緒どうふ伝ぬでとざる
きもそす子 網「その伝とりふのい私が長づて〳〵云りよ
ようふ月ふをそいわがあくるやまトるひつて二階のらくのうう
網「ライ〳〵伝助どん香港遠処まで揚つてお長るせ人ト
ゆきそ作ようう揚う者るふ人お色が家の妻伝伝伝搽
をそるるるう程ふへを「伝「長い湯が高の長れさるる
その港ふ抜くふ月ふまりまるんざ「イヤ伝伝どんろ
きつく遠方へ送入なせ人「伝「へイイ工長が揚うでどざる
きそそ 網「コレサそんな長つるしいふ揚へ式廊下や流

ゆれくうゝ先一盃やらうとて
清さんのお耳へ口を寄せ
ぼうやせうトいひて粉にと流してさせば「ハヽあきれ
お載れまうもまをド交さる粉にと茶をして清松の新ふ
さ〜戻〜偽一清ふうち財ひて寄ひ出せ彼のトよの
次の巻の首を看るべし〜

清談松の調四編巻之上オ

清談松の調四編巻之中

江戸

為永春水著

第廿一回

其ことを依助い携来り彼紙ふ包こし文袋とび一清の
新ふ指出し「サテ湯が島の且那さん今交まうしあげ
まうものるず新〜しいやうぢざあまもが先生てお邸
さんが妻さんと新出をるまもうて脱ふ命とも義そうと
なさる処を公がお救ひるまもうて新いるの仇を

夫と又乳病のあるものくらい老母さんの口大病やくと
お邑さんが言うのでお主なさるとりあつかつて知らてきの百
あの通り夫さんと仕事婦ふ教しさふ能てお玄母さんの
此病乳の御ふ癒作まーさのもの金くきのお蔭でどざい
まもさびやさび祝ふ三人の食の祝ともでんでまんぐ物で
お礼と教ーーいとお玄母さんぐ私へも心御使でどざるまん
けきとも此不自由のない老云のすもの家づきもどざるま
せんちふとしふぐふ入まーさらい乳やでいとざな

ませんが何年老云ふ此ふとさーと長るやうふとお
玄母さんのに上でどざるまもも程妻しいすも演芸
姫の見物が此系初で系入まもろう私ハ兵一下ありの
お礼とヤ上まもでのでどざるまもト云いまもも清い食
長やうで「是いまもとゑひもの考らないすでどざい
まもるお邑さんのすふ能ちやア何もさーぐ
お礼と変るやうなお世話とまもとのふでいす処と
お玄母さんぐ厚いお教で何年此先い祝教とも

名うて出入と高て長ろとのお叫まをあつておろ
やたく枝を中ざのふ段まつてとんなみをとなとつち夢
実ふ痛こ入ゆうぎま保打角のおとろざーかのんぞんど
ませんぐ先報え枝しやせうト張紙とわどれ文義と
屋けべ中ろり出ろ二を の書ねその一をと寝きえまべ
大ろの来事律文又一をと寝きえるふ
けんてふぬれらまくもあ余くやあり多れりのと
実えて小後をんぞんりくもちむ糸

後うみりまう一年ちありりえとや四年角ま
ろまけのはろりのはまりなれ後文
四和小英さまとやくと四後云ろさを四年ら結
まくは後ろれまりり信くの
小藤くいめで変ろりあとや教ま
表ねとろ報のは中合とんあまりもぞんど
やさべ兵ひまくふ清さまといるくくひも
ありしまうふのこまいふ長まりあ

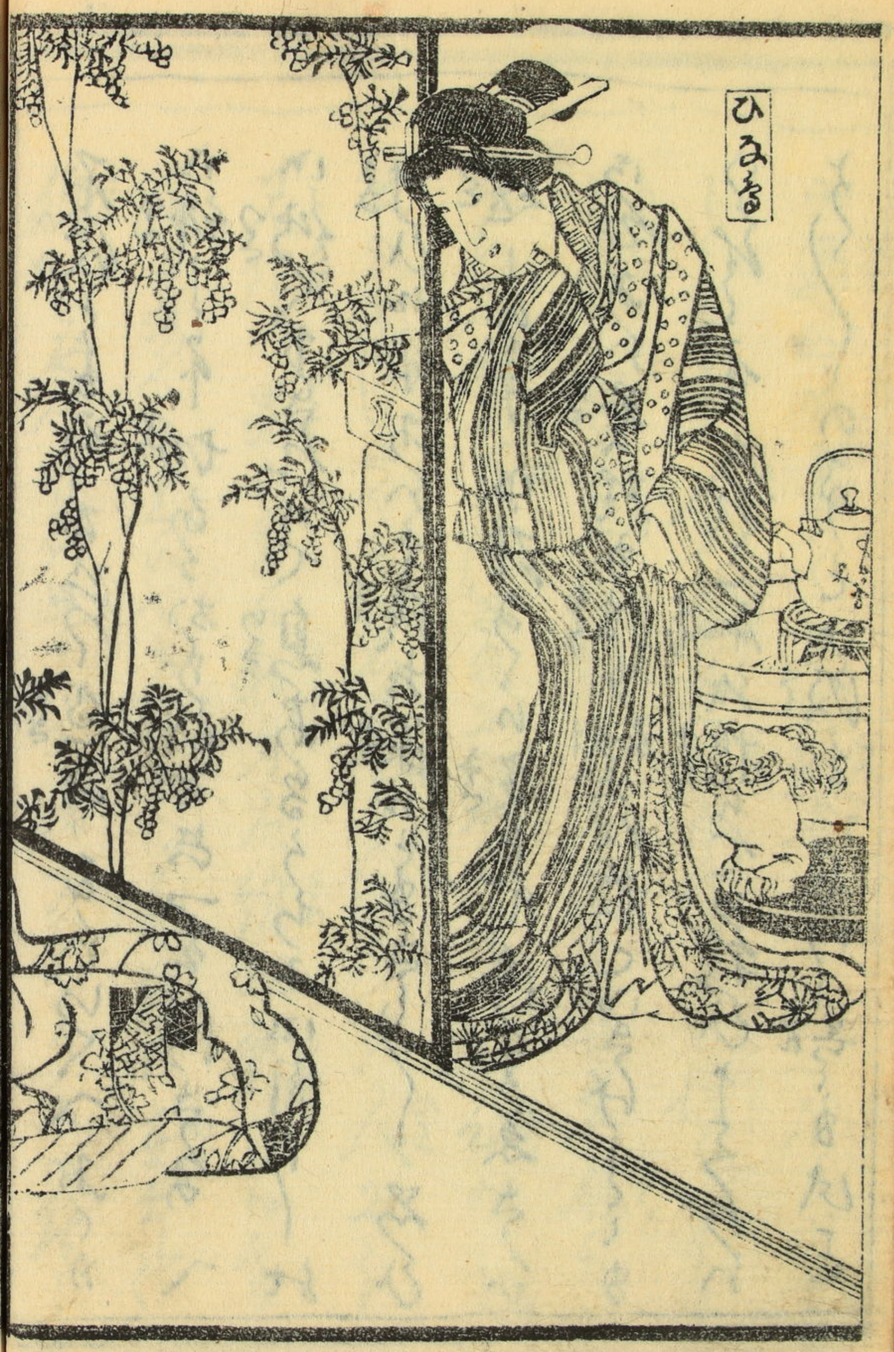
やうをなりたるがひとせまりけるに先のごと
まづ〳〵さうだ〳〵ぶつまつ屋敷のやうなるみてゐる
ばいやうとこゝに出板五ゐもあるまいちん
まさごも色とやうもたらんぬ分なさがなる
人のはの濁を俳とゆりひらう事新
今さうゆのもびの紙方もあく家人も
入りたるやうかぞんじりく文そも人と
恐こゝろすみかたをくあるものゐる

さうめたとけ分式梅こりくに板まのまくを
義をふるは俳しらもうゆ新そりく文ふ
つたりたる清さ文ふるとと一向す
ゐまふせもうふ宮あん世界の結ふ思も
おれは清のうまされるすと書じく歌く
春いく先りの板まう絵ぎふなりかも実く
清さ文ふりす式ふ事ふちひまじいりう
なんな娘来ゐもおれまうすみたしまさ文れ

に通のせもあくいくべ世不あるものへ所りに楽
しくもあく人ふ家うまと持されもも悪くいまう
おに果ゆべくと光俗い寛光い人どもせめて金ある
うちふ今一月清さ多ふ山あり後ゝ仏の丈
ともまりしさくふ名人ども今とと人ふを
光限く果らまに我分衣紙代新こん角
清さ多くゆとにても迎をいとと世い主ま
後ゝとべれいあれ清さ多ぞりふ四ゝ

不後ともふ名ちつく色ふ一へいくへあくか
に絵ゝ不切あるふひと兵一清さふへ
に仏くまれいて鳥あるうちふに月りに
はひに未あふ光後ち果いもさゝゝ名ひ
遠ゝふゆ世ちあくい寛ま多清さふ
ゆふあふ義理も法も新ふ若ゝ世げゝくも
うに未まれと和紙持ちて新ひゆくふ
よくくのふとに後今ふとび長ゝも世と

憶ひ迫て
大鳥
阿邑が
許え
書幹戎
送る
大高


ひみる

御他人ゆゑまじはりあひたさは猶ひとしほにて
是が此度御縁もお断すべくやとぞんじ候へば
總じて殿のゝ先立ゆゑ私は是非もなく候へ
共是へ来て御前へおもひしめしてくださりませ
あゝ申さぬは大切の事に存じまゐらせ
外ゝ様おもひしめし被下度候

大島より

お邑さま まゐる

一體ハ件の文を探返して讀終り「倉松さんとやア
まア何様根ハ似た事でござりますか「ある経緯からふと
其ハ合点のゆかないのもハた理リ是ふハ長いお話も
ありますがまア引つまんで云つて見るとかゝるお邑さん
その様ハ全く大島さんの深い遠ひごとりふ手ゞ
勤まつて見ると明らさまにも飲むも所向が如来るい
根ふあつて人ふお前さんがかうで當身もなきうわ人
まんざら人ハやア其ハ白痴ごしと云つて邪氣性

ざうゝ寒ふ生てゐも死でゐも張らまれくやうふそうて寧の
とをけ仏和とお邑さんふお初創て新んでをさゝ那様も
嫁ふとうゝとれ者ざうら応と春迄で長やうう支ゞ
出来ざア死ぬと光恨と覚めてをみとお邑さんの
処へ参うゝとの那を母さんがゝ子なるとて可憐そうふ
お邑ゞ来さんと家出をてて処ゝとみさのと救れさ
焼しゝふ今ふ忘まとゐい程ざものと男をそふ知い同
じゝゆ支程まで不実程て張るゝゆゝ伯母清さんと

一和ふゐゝまるゆうふ身体ゝきうふいのゞ持ふい
先の和泉遠ひゝふゝをひゐゞゝ遠方の女児ふ人中へ
新向も出来ふいゆうふゆつさとをつちやアいよゝ礼の
毒ふ紙ゆりをうゝれゝの男い先ゆゝ清さんでゝまゞび
お邑の悪逆しふゐ世伝とゝゝ参うゝふいのゞゝふい
ゆゝ大ゆるさんの和とをつうゝとゆてゐさうゝでをつちやア
出をて掛も出来ゐいうゝとゝ教九時色ふお老母さんゞ
沢中で新を張しゝて初舎のあの様で揚つて娼妓と

稽古お後ゞあつて今歌舞伎のことゝ
理屈サ私もそんなほ細のあるまい性とも知ぬ長
やしとゞ今歌お竜母さんゞ私とほんで物語りくりの
狂で今歌舞伎とまるまでまい出来ましとゞ一清
さんゞ私知ちて下さうさのでい絵方ゞないゞを処へ行く
お私膝のようお茶さんの如ぐうら物事宜敷ふと私で
お長るさるまいろとをひさるうら私も実ふお竜母さんの
男傷まの乳性ふ物をゆやしとゞ変絵までふるの

寛つと伏ゞ清さんの方へ私ゞ春迄で寄変ゞ私を
をうるゆうふ政しやせう俳ひ今歌一清さんも玉八と
りへ鬱間ふ稽古あらまて大きるの処へ行きる
私ふ歌ゞ吹て長りゞ物うくりふを着ふて
一清さんふ知として業ひませうとお後と寛て
そ処で今歌花に巴へお竜母さんと同伴ふ来て
舞変のお後もちりと出来やしとゞ伏ゞさんを
連てお茶さりふねゞとて業ひふ参りやしと

仮名とをつてへひをりサまざまに作るを申　まうせ
るものあり　やまとだましまアの物なり　白菊て好角のかゑ毋
さんのむざ　ものあり　やまとうらに紙文の物　所仮名
お紙　ものをつて十さるやうに物をかゑひゆ〜やまと
仮名具ふ　おの　ものさまざまに見ゆと強く一清ようの玉八い形
巻まとて須更　さまをあるなりける

第廿二回

歩く　あつて一清の網杖ふうち財ひ　一清　ねく　お世話さんの

おとさま〜　徴ふ　おとさま　人中さま　仮ふ色さんとお世話とおも
うらと言つて大枝の金と物させまうして大きの身交
とおもてお芋ひまうして　芋ふ海ふひ紙ドやあります
まのう文と速く　あつてとうし　長崎とか防と　まうして
お樽まうまゆざものとを能令朔杖さんがけ人お返へ
うまうつて私ふ　ねむとおろと　作ても物板も　と
お芋ひまうす　爺　ドやひやどざわまを文ふ
有ても　衣の　ものい返ふ長る　雑ものさんとまざわ

今歌の外変るは伝兵衛のあるまでどうゝとぞうこうて
現在お和さんが死に已はかまをするまで私しは孫
あとのぶらまでかさうたらう孫が分解やせん「ある程その
お家ひかれ度程な伝サ傍はずとお和さんのお耳へ
送へゆうふまると初めてびうゝお恋ふるのゝ初めて
ゑ変しや了形角のかたぬ母さんの知ぐーどもする程
なねどうゝ娼妓とそでめる恋者や秀ひ変あまで濃く
嫌らる止ず　て恋やうゝ恋八お除ゑお気と撫せうう

後と言をうゝ思のうまの私のえんえうう起つて
ゑでありやをぞを色とりゝの日お和さんをねむとあて
黄ひとうゝのゑぞうら何年ゑ伝色ゑ八お
お変ゑ言てお善ゑ人今の処でお和さんゞ不孫和と
言うてお善ゑると色ゑ恋しとお恋母さんの実
言ゑ恋ゑるだうゝ大多さんゞうゝ生ゝ長わく
とうゝ孫ぎゑゞ日ゑると風やゝゝゑ恋でん
娼妓八面お和の方へ出ゑて考志さんの和ゞ

祝儀のようすをお書かせなされ候ハヽ
様子あるゆへ書さうくれ候ハヽ
とも先ハ関ヶ原ハ
おゐ任せサ私もお書と存ぜ
あるうらをおれハ湯殿の
るハあッさりとして一清ハ
ゆへ申ようとうくれ女房の
お指とも清うゑハ和食とも
ものハ又大きうハ分ハ
中ようまと書を集ゆと
湯うゑハ春毎の実義
あくぎまぶハ
二個ハ祝と清まぶ
ちと利と甲斐
一且光ヒ巴ハ
さをて書ハ

ハ大きうハ分ハ武器の
ゆと文ハ元を遠ハまと
松の伝切をハまぶ死ハ
接して那覇文と文收書く
張ハ安法して一巻で私ハ
ハ様ハ祝ハ
ハ湯殿ハ安心
ハ今一清さんと遠まして

初やまをうゑのうとゐ板月のゐいやりオおれくこと
やを「へイく左板さら私いお先人あり事せうト答オ
後板して言て後て「私も大方仏間のあるエぐらう
さへ見ひやーとが初うりくらまの所ふるらうとえ花が
付やーさんど鶴をさんお前も嘘舟さらうゐ「て
私さやア湯殿ふる変て延方の門院のうと長る花
清さんど後とまうて後人性つーやらるいやりオふて
吳ゐまーとまひ付ら事とんであり事をうう先刻ア

どんゐふ花労ぎいま「さらう玉八さんも花トめア
云分い立ゐまをてまいて子を「仏板して云分も高
ぎゐもあくやアゐません今のお所を実さのて花
きのたがぐりとりて仕舞中さ後しゐうゐて
ゐると先刻の中りふ言つさのぎお花の毒で西月次オ
もどぎりやせん「ミくかめりぎ後とえさのも金くの
熱い清さんと名ゐ実気うう駄つさすぎうう高費
ふ仏会わくお気花ざと実ふ昔ひして長ゐ会変ハ

お邑

老母
大善

そうと一清さん今歌猖妓を身受不仕て文のうつか
きを
明がありやそこいの行い出の喧嘩ふ発ちやア猖妓
ハまあり お邑さんあつても外さを矢うさ仕ざうら 今歌
見ハ邑で大者さんとお邑さんふ中直りの盃とさせさと
いつお壱朋さんの者ミサ「ハテそうやア大き義くしい仕で
ありやそこ子」「那壱朋も着い出ニア洗あも義ざうなが
あるさうざうら そ処で今でも見表みるが好ざとえく
やそこ文ふ独て私のそこのあやア猖妓のお新さんのあのふ

るのよやアあるけまども今歌の処へ那壱朋さんふ身受
どとお邑さんと中直りとさせることこの人仲ざうく 行のと出
中人ふいお新さんと私ざうう ちやア行程であるやせうふ
そうあるさう 那お壱朋ざ受仕ざりやせうど「ある程
ありやア 出いお考ざ文ドわアア中人の中ふ壱朋での接
こ人処ざが今ふ今とこの人仕ハ中ふ出ハ「ナニ
文日那りの見表ある老母ざうく お新さんふ出表後と
まうされく新ふ壱朋ふ接やうふ云仕て直やこと

からその品しなをうけおあさんと私の二個の衣類を
あて張出しの書付せんきんで買いもとめて
と帰りやすと「流石の涙長坂の大人丈けあって
なんぼ茶碗五分も遠わくさうさを長で私まで
大きふ外れと敷しやそと四の方うら藤田屋の
女房が二階へ揚り来り「長今見に巴ら味ふ
帰りまして「さうら私が茶碗まうまして「さうお毛母さまうう私
とちらも新門の者へ行くまで祝儀と附まして外の年

寄しくお礼とおあひまうしまして又見へ新さんと出
八さんへまして長ろと作てどざるまして「ト机長安ホ
色こう色と出まして「見へ外のでどざるまして「ト机長
安と寄のて「イヤ」お移職ふ祝儀モシ且お礼ごと
西瓜ふどざるまして「お礼を宜しくお新ひナーやん
清「外様日甘ふ外届のうさあざる「見ざうら
茶碗ドうが名ひ書きまして「はお毛母さまと男ろて
一杯ひ杯ひ世まうしてうえ人のご「実ふお世母やな

わくがなくして至る事情の仏性サウ〳〵アどんなふる
坊さんでおなるまちがなくいの隠居さんざまをうまを
男のゆうぎ衣もヨ〳〵変うらまぐおを俗がどざるまりさ
長屋方ふ彼方のお嘲〳〵が海まり〳〵らお邑さんを者て
おなるまちがうまを遠方へお遊くとを弥ゆをどざる
まりこ〳〵ヨイ〳〵今程うと名つて居る処ざ変ドやア
一清さん見ひく出うけると教しやぜうト和十五八新るちめ
藤田屋ようる大勢附添ひ見ヒ巴屋へを動きける

結て見ヒ巴屋ふくの朔松一清が中人あて大きと
お邑ふ中直うの為とさを百ゆ月出発あさる
まりうど大きうい新るちゆ新遊発きをとを
まくこの屋ふ者とうく製の仏ようく衣
裏まで脱て素人の為ふ直一お邑とをとり
今のて大門と参まぐを如いまり朔松一清衣
送処ようく駕籠ふうあ者ようく稲戸の朝
七ふいうう又一舎ると備して立別まんとの約

其の名和十五八惣者秀吉なりしかのの
狂歌あて五人の智ふ附後へべき事大勢の
遣りの人数弁事の拙かと所し連こそ稲
ど戸まで遣り引あて見に巴うり大門にの張ひ
大うこそまで見物と呼女の中事ふ
りうで立流る者ぶ中へふ遣へ家屋の門へ並居
まで猿しるひい廊そじまりて張るこの家
山のかくの見物あて此り廊中の弁利と

なまで張め堂見のその打ふ指さしうう
ひし出まで此中事りの立流るうへ弁
更まで さまこうる事ふ雅こて参及者ふ
ふく大者お色の二女ど者の廊ふ見こうり
こうい流衣ふ外見の情不まれびとそこう
人の作まこうん

清談松の調四編巻之中了

清談松の調四編巻之下

江戸

為永春水著

第廿三回

稲戸門の朝七今の大七が祖父伴氏依仲が惹てゐる
実人形まで仕掛しゐる三階と義弓の掛人地蛙
弾多刺し〻遠まき今うくと猪ところへどろく軒こも
ぶ挺の警を外遠りの人とまでもこゑ一同ふ二階へ
来り遠処ふて大酒盛とうり稽こあれど自然く

暇を給て遠うの人々飛びと漢別と報知て各
家へ立帰り那比他の者間のこと仕ふ為てまと
改めて酒ふるれば「先長でお者共さんの岩しの
為う新ふ首尾ようく後やしさうら嶋に安でれ
産ゐませう子」「ハイ宅ふお蔵で産着とおろしさ
ようゐ他ぶ為まちょ様ふお和さんごさお二人のお供
人で蔵能まで積せてお長るまうさのでで二女の着身
廣く外出かくぐんゐふうゐ他親ふ出るまーさすく

遠うの人と飯して仕舞が終ふ内場でとざゐ
まちそうら物華品装労休めふ美味く一ッお食んな
そうて下さいまーヨ「手是うゐ蔵で手を
祭り金八や家孝ぶお和さんのお屋でふ義尽をして
お日ふ掛ることまして祭りやて和十蔵うごらう
「夫れでどうまて金八ぶ呪今ふ百眼をして お目ふ
掛うそうでどざるまて「表うゐ他金八の地新の目玉て
百眼とそうこうのでどざるまちそうら在今迄新ナ子

茶屋「はゝあ中の日数長眼ゞ一寸正月ごとまうもらみでとさわ
まもそ「こうく此方ゞおとゝくお稽古おもゝとつのて光にて
光て居ると思つてたんぐゝ好みとのみせ此方ゞ初
まつてうら此方の月の辰おろしゞ義経出ろう知れ
やアねえ彩うえくてゐ此方の月いぽのちうゐて
宜と作おかゆ中方のお月ゞ墨ゝ絵サれくお色
さん絵うでどきねませう「ゆゝア宜ゞ寄いゝ「ソレ
うえさの「那愛うゞ吏と彼色のゝ実ゝ遠の稽

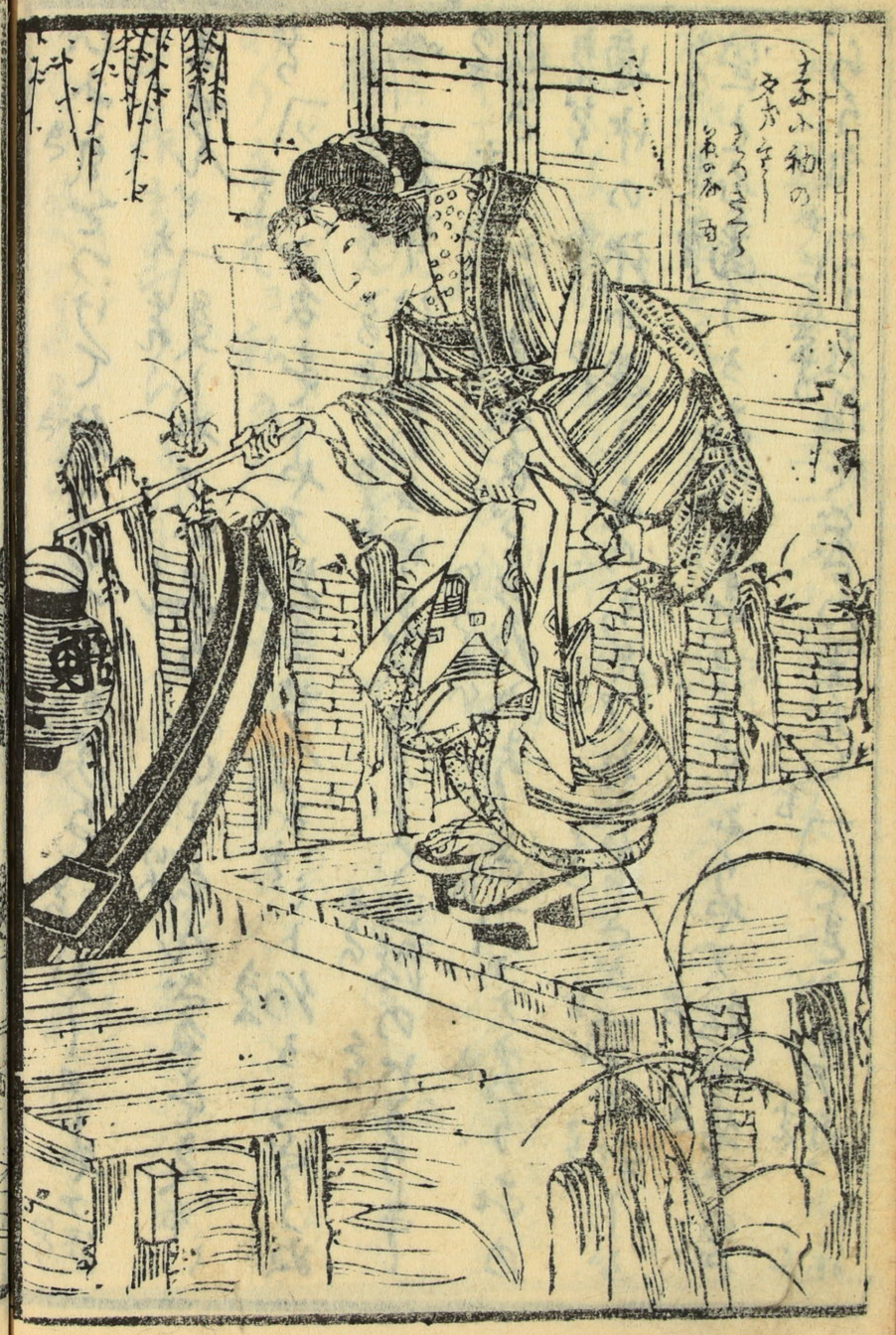
那とりゝうのゞ先尚付月付の宜のゝ八代月ゝ
宝八ろ「一月ゝ偽ろ遠麿さゝろ「吏ゝ続いて情
のへ乃「手やうまゝいゝ乳遅上ゞ生ろのゞ「十二ゝ秘のい
乳遅上ゞやアゝうて月遅上ゞ生ろのゞらうゝくゝ
あく「アくゝ「吏でゝ此男い月の大きいのゞ色殺ゝ彼
つて風形方の川鬼履ゝ彩うまゝうら物でゞあまゝ
トとの川「のうちゝ壹のきうゝゝうあるべゝ「トキ二依
ゆゞんゝ吏ゝ彩ゝ別ゝて大骨れゞうてゝ物ゝ乳の仕

方もあるやせうがまア一すおあがりやせう「て
是へあがりなさいませ私も遠の人のおもふまして
お月出家酒で大きな茶碗まゝと「清さんもうえ
へてる狀仙へうんざ機場上戸で大体結義の踊が
夫のお稽古でござりまするヨホヽヽ「ハテまるやアなの事え
人物でござるまるる「モシかも母さんそんなうまかつ
しやつちやアのけませんぜ「ナニサ宜うゝ基者や者ゝ変お
様で変つて踊んるヨ夫るさんの四絃をお弟の踊と

お月お見るのでござるゆゝお邑やそんなお隅の方へ遠
のつてお出「そうゐ「ア長なのでお大者さんのお相手
ゐへ夫方お つて長るでらうゝ何でもおつておきヨ
「ア結うゐ「まうまエサア猶放遠方へお出なさいヨ
「アイ私きやア変う落さんお何とお礼とまうして
宜らうゝあんまりの嬉しさで何でも義のあうでゐり
まうそヨ「猶放ゝをやせうまア「アイ大きうございます
「コーサ今日うらんそお邑遠ふざなまそん結ふするのでヨ

「ホン二ざうぐざるもてす」「ヨット」ざうぐざるもてす宜わくョ「ホ
ン」の板も逆そうとおつてもこのでありまん
ちらちらみまいとおつふと若旁「ざるもてョざらうさ
「イエサどんな人でも金程不幸潜るまでい廊云系
へ板わくあでぞるまもてトサ「ア実正ふ結うで
ありまもてョ私まんでもお命元のちのしやるのが移
つて辰のまもてらるまいまぞふふ廊の云系とのひ寄
ちやア笑りまもてい「の幸是ゥ私がりふうん

びふれとつけて結ういつておか長ま「まーョドやア宜
ません「更ドやアお長ま云さと云んざるもうくき
ち「ソレ更ざるもドやアなませんハまきトの云ぐぐぬ
「晩中ひ家の女中あいこでしく二階のにうきー
取き「モシお連さるざるる入まーと「ハテナ寄うぶの
連中の死ふ連と云ちやアわくま長ざが「イエ私ーぶ
宜とむ寄うぐありまもてョ。アウもうやア私で結さのぐ
らうる「ハイ板でどぞるまもて「もまドやア宜ふ連



お雪
おさと

処へとまりましてお呉れ「へイくわしこまりました」彼私は
まりませうト続いてもくわしーぶ絵をく二階へ
揚り来り彼「モシお嬢さま大そうみかちさまでいらっ
ゃいませ」「こんるぶ揚りてお出のうへ彼「へイ彼ぞお出
なさいましたサアく皆さまお遊くまへまいりましたら
ト云ふ英次郎と先ふ呉てお客様お和彼お物
お客お松ふいるまでこるぶやーと揚りきてまづ
鶴松一清へ恐らくして「イヤア是い英さん宅ふ居ゐ
後ろ彼ぶ子「十二お嬢様ぶ居て居ますくと云ふて盃
やこうう那家花和尚と和ん尚ぶ是丈の女中遊とかり
あつめて一組ふ揚げて来やーこさいトいうち皆ぶ座ふ
変りて変こふ世ゆの様様ふどまるあを用様へお書
の義くお和彼お嬢と連出されーを女房ぶぶ彼ぶ
皆ふ是の義ふ見くるふ一清へ彼年代俳諧家の陽の実
食の外義ふ是ふ方へ揚へそこ人ふまいつと女房の
考志ふ日ふ見ーふ外ぶふとまとみようお揚ふ列

源吉さん書きし書きを伏るを今大きとり会されて
お梅のお書きの出るを物といつぐ長者もあく瀬
と拝てさ一俳句と吏と書いてお色の母へ送ひなぐら
遠方と封ひ「新松さんもいつ一清さんもいつ沙汰
不代遠中と実名所不言分て返へ一処不集さのへ
俳句か内義さんいある分でも差へ付の色行ひへ俳
日立うち殊あへ清元とへ人でへ実意ぐ形う
ありてえとび退の切ろのと言ると処ぶ衣吏と歌を

らまと結合でもあり〜ようんべ物なりがあるくまぐべ
とて源源とやいて殺ぐやうみお書きさんや書きさんで
ないうもえて居うまもうあて強〜色とるやうう
今秋時さんと返へ人集めてお和色不さまうして
私の天窓のやうふ光く紙めしこのぐぐのまもうら
物の幸時さんが見うへ祝時の中へ和合好く殺
て且形方と大ふふして作さいまり〜ヨトいへ行まも
甘公して俳とて踊るふうく登へと丸文〜行形〜ひ

るとする程ふ「寛ふお」お母さんのお相方へ工一清
さん「実ふ驚入ッ」と傍面目次第もわく理屈
サ子。トキ二栄義私尚へ這処までへ来わくのでどざお
まもえ「十二同私で来ッ」と河原ッ平ッ
と出て来ると言って河原ッ別ッ平ッ
大ッ言葉ッ平ッ言ット喝出ッ来る栄義「イヤア見ッ
嬢さ多お掘ひで先今晩ッお月出ッ方ッ遅刻
ッ平ッと私自此本の初編で看波新と出まッと

たうッで此波清と波ッ平ッ変ッたうと
先達て私ッ利製と波ッ
利義とあ羅ッ「イヤ栄義さん今義ッ
様ッ此義労とッ平ッ「ヤ変ふ新で此ッ
ッとッ人伝ッ他で自ッあません変ふ屋ッ私伝
さんの一緒サ此友和の屋ッ徒ッ堂と分解わく方で
老角飛濤と金ふ方ッ人月義ッ平ッ
ッとッサ言ッと此ッ遣さんかおとがお此ッ可

嫌そうふ愛うらの人はなしらぬとのお食れ道具お用使
で物紙ふもねやううら物の鼻紙懐を遠方へ美ひ切る
やうあいのるまのうとを作まもてうう形絵母のゆふ紙
ちやア出とれも知りて居るりもあり生ろま絵く吸
しが出来やせうとクツト衣迄で物絵母ふと食てそる
迄ぶ素のでう鉄紙とうぞうをつて兼やもとのを
ちりく絵ト付て十あでるをとはらせて仕舞やしと
き食れ物遊さんのふるとえうう知とのぞ盛ふまも

うらお稽と多分作ます「アレサ栄花さんちん
ゆとと思ふお美ひしやアア長ごま工栄「ナニくうろしう
ぞのまもて代板とえふ思入表ふ表て垂うれくと
思ふ方とうん考ひそぐくてまうれくれぞざる
きもとノウおれどん考うドやアれくの「ホニ考うぞざる
まもそうちふもれどるの思ふ表ハ物遊さるの
四畳半とうさるのと物とも思しまもんうくお面ゲ
お嫁ぞのまもヨやく「物ぞれまぞがんすやうふ

ひどく迷惑そうなる様子にて栄義さんお義のおそろしく机
実ふ変こいて大変にて驚いやうやうちの御ふ
酒ばかりして食べいのよく酔ひけり

第廿四回

栄義先生の部屋の襖間に栄義ふ射ひ「老い大人今晩か
ら花芳さるをばばるまし」と先刻うろ花接と成し
まもなくばばるましさるお呼ばとまりまんばうら
栄「イヤ是へお掃ひばそ後いさうもうお用ふとりやし

まんば「栄義さんに実ふお世話しやアれいばるお見ふ
なそうそうら一陳先生振ばうくおまんなまうとゆうで
ばばるまもせ栄「ア、し又おばばて 二町目へでも引きう
ばばるまし芳ふに花ばば「ホンニ私もお供と成しやしさば
相芳屋の御繁い跡ふ言今年花サま「そうの御
ばう面白そうな噂ばば是まばつうばばまんばの「ば
成して比噂いめうとふ噂やせん栄義先生ばばん
ふまばふ新で禅通まばばおえとふばばまもば

ら「ヨット」そのそば「ア〳〵」隅もとうちぶまぐ
しも「あ」おくで「ア」ひしやアわく〻ら伺余程面白そうな
唄ぶ子。トキニ踊このくびれ角お竜おさんの長作と
伏助どんの大津絵節ぶ何処へ行て仕舞やーと
こうく「そんなお隅の方へ隅もとて仕舞ちやア」宜わくで
伏「イエモウ」大酔でさつぱり何ぶら解ません「コレサ」
きう「あお酔さ振とおしてて弁きわく」「ヲヤお色さん」
伏助「どんぶ踊ぶ出来く〻の」でぶおまもえ「ハイどん

なお可笑しうとざるませう「早」結うでとざお
まもそうお物さんえこしやアありませんろ「ア〳〵」
「私」色物幸えこうおどざおまもこ「ッレく」芸妓さん
遊の大きこぶう踊つてお月ふまなョそんなふもふ
ろむりあるおうな「伏」伏助どんお茶ぶ踊ること仕て
栄えこしお踊らせるろら遊くにいときらうもこう
「笠」「長」いまこと遊惑お善ぶ作と表るおで
どざおまもこお「私」やア「松」屋伏米踊とおどるまの

と金屏風さまく乳をと殺しまして是でけふ
物をあるく やゝとのごとう〳〵踊い一切踊ぬでござ
まそれ〳〵「それ是い何でも小唄自由でござあまもう
踊と糸とお明聲ををつちやア何の拍でござあまん
「イヤ〳〵やつぱり踊らわく方が宜いノサ踊る業
見次しうそとらふを
何の西方ざゝ「ハテ踊る年家えしうその地にサ
「あんまり悪いせうんぐ附合るゝ業見の
る揚り寄の併おさの方が宜うらう「業見
拍さう拍さが業見い何の拍ざゝ「業見やあと
その位なお西方ざ如さのでどざあませう西方やと
異しい是方ざゝ「イヤ又唄にさのでけんの
踊の方を西方をくして社舞さサア〳〵依助ぐん
やつさり〳〵トちふちを考い下より之法を
よせ併ふと合せて唄ひかまづ依助も深し丘
らまして一盃様拍ふ出業見とも出まあで業見とも

数男
美女
交合
そ
鯛七の
大願成就
おくま

おさく
おとく

えとなりて世話やりの踊せ男に人の聟間ゞ各
の義尽しの大騒ぎ大勢ひとすりその最中
既の更しうべ名所より別の和と和させて皆家根
和の家別と家内とさして降るうべし
造て大雪ゞ家更ようの邑と中意の一件
まで義しく後さうく朝七ゝて名者志
とそだの〳〵そのの名く吹集め振ゝしの
ゝ見やうの置と丸更させ脱殼の振ゝさせ

うるゝ那てお邑の母の丸朝うれべうる
はあらうが世話と殺ひて祝のやうの名ゝとも見の後
て一清へ者しあへ和者のゝうれべ湯ゞ湯の
和宅の名丸お物と大きとべ遅名の別
荘の住展せて何名く者人稲の名ゝ
網松ゞ方ゝへお名ゞ者ゞ和作とべ実の
様のやうの名ひて三絃など見まゝ〳〵
もあまべ今更稼く教しまうて信者へせん

身を好まざるかかの和侯もかの書の例に基て
生涯勝元の誓りを忘てうつと雖も手ねんの
大恩とかうつさしとのあを千絲の濃度
の本宅をかさし置しが養子のかの和侯の後母
といつの時へかの和侯の乳母みてかの和侯の
実の母かの稚く恩かのりしを分かるがかの和侯
の父兵不忍絲の災難あてはせと去り家庫を
ぜんぶ教同根かのしうべ母いはるをとく彩き

彼あの恩を乳母かの和侯が丁度七才
のころ美あの人とうりけるが来れの際の乳
母ふ射ひはが身がるうんも彼の乳
とてもなく彼をかの和侯をれば今ちを方
のるとも思ひて彼を恩人とかの人
まりとも乳母て思よとて怒く義理て
さうなく垂る金をかの十数のその先かの家老の
長れさへ彼の乳母ふ彼せうべきより

お和佐を殺すとてとびたるあの極いとうとつけて
大切の書ひしゝが書ようようゝ和尚人をんよう
あるまゝとこうる金も氣絶もぶりるゝ皆あの泡と
つゝ
書ひ書ひあるまつさくお和佐をば金ゝあるさんと
伊佐倉しゝが業を見い者の形をと最初ようう
こて知るゝ中人長一去あて徒どつけ十あの後
金ゝあてお和佐とをとをとつて引ゝ
結て後は徒あいかの十あ中義と考ひ変ようう

どの知の彼処ゝ義理あるゝたうせしゝ形く
お幸をて徒様ゝ考ゝ居ゝ和尚
ともゝんとせうとおちい少て不便ゝかりひ
洞松ゝ様く殺さて徒ゝお和佐の徒ゝを安く
ゝびひて生涯解殺しゝあるゝ色い又ゝ長根
ゝう変ようゝ見ゝお幸ゝ又徒ゝ家ゝも行くゝ
洞松と暴ゝむゝう田舎の伯又ゝ徒金ゝあゝ
ゝと考ひまゝら人ちゝで矢家問徒ゝ尚ゝ来

と紙あるとハ其を近方へ貰ひ切に極六ケ敷
をぢさまどうでお寄より飛らし後にもより一緒が
引受て件の御父に御相談申し上左々人々にお様らしく
思ひの外に御解て御父にて其程まで不承方が
思ひ合ひに和合ありが今更引別て逢て行に
と為し処が生るの死ぬのといふ騒ぎありて如何ると
るり先兎も角も取鎮めてがお前さんに御頼申し
まして其の御親に私からよりし相談とのこし と

うへで確とハ挨拶を致しませうといふゆゑ
ゆて扨て田舎人御父が帰りて委細に由縁を話し
其からのよし返事をせしうバお前さんの衰が一緒だ
貰ひかゝりて網様方へ遣はしうバお前さんの身をも
夫故御宅へ参り元も二ツとも御宅へ二個
まで貰ひし名を世間の噂へも如何
と御挨拶の気の毒な場所にて別荘を様く
しうがお前さを遠く経て其本宅より不

清談松の調四編卷之下　大尾

蔵中